

仏教文化公開講座講演録

文明としての仏教

―大谷探検隊の偉業から見えてきたこと―

入 澤 崇

龍谷大学の入澤です。ご紹介いただきました通り、西本願寺前に龍谷ミュージアムという仏教総合博物館が二〇一一年四月にオープンいたしました。今、その館長職を仰せ付かっています。今日は皆様方のお手元に、現在開催中の特別展「二楽荘と大谷探検隊」のチラシを配布させていただいております。

二楽荘あるいは大谷探検隊といっても、今の若い学生諸君にはピンとこない存在です。これから西本願寺に大きく関わる大谷探検隊のことについて話を進めてまいります、講演のあと、時間のある方は、ぜひ龍谷ミュージアムにお立ち寄りください。

本日の講演には「文明としての仏教」という非常に大きなタイトルを付けました。古代インドに生まれた仏教がアジア一帯に広まったということは、仏教が文明であったからではなかったかという思いを私は抱いております。そして、現代社会において今、痛切に求められるのは「文明としての仏教」ではないかという思いが強くなるもの

ですから、こういうタイトルを付けました。

同時に、明治の時期の仏教者に注目したいと思っています。明治期、数は少ないですが、浄土真宗の僧侶たちの中に非常に先進的なことを考えていた人たちがいました。その代表が大谷探検隊です。大谷探検隊の足跡を追ってまいりますと、彼らこそ、アジアで「文明としての仏教」を追跡していたという感じがいたします。今、私たちがそこから学び取ることとはかなりあるのではないか。それを今日披露して、皆様方にお考えいただければと思っています。

（序）民族の違いや文化の違いを乗り越えて広まった仏教

大谷探検隊の話に入る前に、まず、いくつか写真を見ていただきたいと思います。アフガニスタンという国があります。私は、二〇〇四年から毎年アフガニスタンに出掛けていって、仏教遺跡の調査をしておりました。アフガニスタンは、古代においては、仏教が非常に行き渡っていた地域です。仏教遺跡がかなり残っております。よく知られているのがバミヤーン石窟です。

でも、アフガニスタンという国は、現在では非常に危険なイメージで捉えられています。タリバーンの中の一部過激派が大きな問題をひき起こす事件が頻発しているという状況です。タリバーン一部過激派の拠点にしているカンダハルという所がありますが、一九五〇年代にこのカンダハルから紀元前三世紀のアショーカ王の痕跡が出てきました。紀元前三世紀、アショーカという王がインドを統治したとき、そのときに仏教が全インドに拡大するわけですが、アショーカ王の版図が何とアフガニスタン南部にまで及んでいたのです。そのことをはっきり記す資料が、一九五〇年代に見つかりました。大谷探検隊も知らなかったことです。

カンダハルから出土した碑文にはアショーカ王の法勅文が記されていましたが、インド人の王であるアショーカにとつては外国語になるギリシア語、アラム語という言語が確認されました。このアショーカ王の法勅を記すギリシア語碑文・アラム語碑文が発見された当時はかなりのセンセーションを世界の歴史学界に巻き起こしました。特にアーノルド・トインビーという歴史学者は、事態の重要性を嗅ぎ取り、すぐさまアフガニスタンに入りました。彼は、この碑文を根拠にして、アフガニスタンはかつて「文明の十字路」であつたと述べたのです。

インドの王が今のアフガニスタンの領域にまで進出をしていた。そして、アショーカ王は、「武力によつては人の心を統治することはできない。法による統治」ということを前面に押し出した王です。アショーカ王の政治に仏教が強く影響を与えていたことが、法勅文の研究によつてわかつてきました。

アフガニスタンのカンダハルではギリシア語、アラム語という言語でもつて法勅文が記されていた事実。アフガニスタンというのは、古代、ギリシア文明も及んでいましたし、そして、アラム語圏の影響も受けておりました。アラム語という言語は、もしかするとイエス・キリストが使用していた言語ではないかとも言われる、オリエント地方で行き渡っていた言語で、それがアフガニスタン及びガンダーラ（今のパキスタン北部）にまで及んでいました。

考えてもみてください。近代以降、現代に至るまで、欧米先進国の権力者が、例えば中東地域などへ進出した場合、果たしてその言語というものを重視してきたでしょうか。その地域の文化というものを、果たして大切にしてきたでしょうか。アショーカ王のように強く仏教に影響を受けた権力者の政治手法は、こんにちの政治状況を見るうえで、非常に有効な視点を私たちに提示しているように思えます。

カンダハルにはかつて仏塔も建立されていました。イギリスのケンブリッジ大学が調査に入った矢先に、アフガ

ニスタンが大変な状態になったのです。旧ソ連軍がアフガニスタンに攻め入りました。そしてその後、内戦状態になりました。今ご覧いただいています仏塔も、もはや存在していないと思います。

宗教の動向を見るうえで重要になるのは、宗教と政治権力との関係です。仏教もその例外ではありません。仏教が広まるには、僧侶の活動だけでなく、その土地土地の政治権力者の動向に大きく左右されます。「仏教と王権」というのは長らく重要な研究テーマであり続けていますが、造形という面からも、興味深い視点を得ることが出来ます。

今ご覧いただいている彫刻は、釈迦の前世の物語が表現されています。出土したのはガンダーラ、今のパキスタン北部で、仏像のふるさとして知られています。これは、釈迦の前世が尸毘王^{しび}という王であったときの物語です。ある日、王宮に一羽の鳩がやって来ます。図像の左隅に鳩がいますね。鳩は尸毘王に告げます。「自分は、今、鷹に追われている。このままでは鷹に食べられるから、かくまってください」。そして、尸毘王は鳩をかくまいます。そこへ今度は鷹がやって来ます。図像の上、これは表面が削れています。鳥であることがはっきりわかります。鷹が尸毘王のところに来て言うには、「今、鳩がそこへ来ただろう。どうか私に出してくれ。自分は飢え死に寸前だ。今、鳩を食べないと、自分は飢え死にをしてしまう。どうか鳩を出してくれ」。

そのとき、尸毘王は、鳩を助けると鷹を飢え死にさせてしまう、鷹に鳩を与える^と鳩を死なせてしまうと悩みます。悩んだ尸毘王が下した決断は、自らの足の肉、鳩と同じ重さの肉を自らの足から切り取り鷹に与えるというものでした。そうすれば、鳩も助かり、鷹も助かります。

この図像は、王のお付きの者がまさに尸毘王の足の肉を切り取るその瞬間を表現しています。ご丁寧にもはかりを持った人物までもが表現されています。鳩と同じ重さかどうか計るわけですね。それで、鷹に食べさせようと。

肉が切り取られようとした瞬間、これが帝釈天のはかりごとであったことが明かされます。帝釈天という神が尸毘王の心をうかがうために鳩と鷹を作り出して、尸毘王を試したということです。帝釈天は尸毘王のつた行動を褒め称え物語は終わります。図像にも帝釈天は表現されています。

この話にはいろいろなバリエーションがあります。みなさんの中には一度は聞いたことがあるという方もおられるかと思いますが、「ちょっといい話」で終わらせるには私は惜しい気がしています。自分自身の肉を切り刻んでまでも鳩を助ける、鷹を助けるという話を造形化している点に注目したいのです。主人公は王です。王が他者―ここでは鳩と鷹―を救済する、しかもその救済方法が己の肉を切り取るというものです。ここまで崇高な権力者の姿を表現した例を私は知りません。人類の文明の歴史を見るうえでも重要な作例と捉えています。ご覧いただいた尸毘王物語の図像は、今、大英博物館が所蔵しています。

自らの肉を切り取ってまでも他者を救うといった釈迦の前世の物語を表現するということは、中央アジア、いわゆるシルクロード地帯に多いのが特徴です。かつてこの地域に住んでいた人たちは、これを単なる架空の話として見なしていたのではありません。

五世紀にいまの中国新疆からガンダーラに入った法顕という中国人僧侶がいます。法顕は、この場所で尸毘王が鳩と鷹を助けるために、自分の肉を切ろうとした所というのを記述しています。そこが聖地になっていることを報告しているのです。つまり、ガンダーラおよびその周辺にいた仏教徒たちは、この尸毘王の話を架空の物語として受けとめていたのではなくて、釈迦が前世においてこれほど偉大な行為をした、とそれを現実のものとして受けとめていたということがわかります。

繰り返しますが、釈迦の前世の物語、中でも他者を救済するという物語が、とりわけシルクロード地帯には多く

残っています。主人公はたいてい王か王子、またはキャラバン隊の隊長といったように、つまり、人々を導く者が主人公である場合が多いのです。理想的な権力者というのはどういう者であるのかということを一面で語っていることは注意すべき点です。

さきほどの尸毘王の話に戻りますが、王は鳩の苦しみを見無視することもできましたが、そうはしませんでした。鷹の苦しみも無視することはできましたが、そうはしませんでした。尸毘王は鳩の苦しみ、鷹の苦しみを自分自身の苦しみとしました。そして、自らの肉を切らせる決断をしたのです。私たちには、日常こうすることはなかなかできません。こういうなし難き行為をした人だからこそ、今世においてブツダとなることでできたと言語のです。

けれども、私たちはこうした話から、苦しんでいる者たちをただ傍観して、「ああ、かわいそう」で済ますのではなくて、自らがその立場の人と同じ地平に立つということを学ぶことはできます。私は、尸毘王物語の図像は仏教の慈悲の心を端的に表現したものであると受けとめています。

尸毘王と鳩・鷹の構図を権力者と困窮者というふう置き換えてみれば、現代社会に何が欠けているかが見えてきます。困難に直面している人たちの立場を十分に考慮していないのが今日の文明社会のありようではないかと思えてなりません。つまり、鳩や鷹の言い分に耳を傾けず、彼らの置かれている状況に心を向けるということができない。そういう状況下で私たちは今を生きている。テロという実に卑劣な行為が生まれてくる背景にも、他者に対する無理解が根本的に横たわっているように思えます。

自己の肉を切ってまでも他者を救済するという話とよく似た話がシルクロードに多く残されており、その中でも日本人によく知られている話は、「捨身飼虎」の物語です。王子（前世の釈迦）が山の中で、飢え死に寸前の虎の親子を見て、王子は自分の体を与えて虎を救済する。なんとも壮絶な話です。こちらの図像では横になっている王

子の上に虎がいます。この図像は、シルクロードの仏教遺跡の中にあつたものです。こちらの図像では、王子が頭を下にして上から真つ逆さまに飛び降り、そして自分の体を飢えた虎に食べさせる光景が描かれています。

「捨身飼虎」の話は日本に伝わり、周知の通り、法隆寺の玉虫厨子に表現されています。この図は、中学・高校の教科書にも出るぐらい知られてはいますが、王子が真つ逆さまに上から降りるという表現、そして、横たわる王子の体の上に虎がのしかかるという表現からは、シルクロードの「捨身飼虎」の表現が日本に伝わっているということがはっきりと見て取れます。

法隆寺は聖徳太子ゆかりのお寺です。最初にお話ししたアショーカ王は、戦争の愚かさに気が付き、「武力による統治」から「法による統治」ということを打ち出しました。そして、わが国の聖徳太子は、十七条憲法の第一条で、「和を以て貴しと為す」、第二条で、「篤く三宝を敬え。三宝とは仏法僧なり」と言いました。アショーカ王と聖徳太子。ともに仏教を尊んだ権力者です。

仏教の教えにふれて、その教えが「和」を構築することに資するものであることを見出した権力者たちがいたればこそ、仏教は拡大したのです。シルクロードでの仏教の歩み、アジアへの仏教の拡がりを見るうえで、権力者の仏教受容は重要なポイントです。

現代社会において喫緊の課題であるのが紛争問題です。昨今は「イスラム国」が大きな問題として浮上していますが、いまだに解決の糸口は見つかっておらず、混乱の度合いを深めるばかりです。

ここでいよいよ大谷探検隊の話に入ります。仏教東漸の跡を探った大谷探検隊は一九〇二年にスタートし、一九一四年にシルクロード調査が終結するまで、三次にわたり調査隊が編成されました。第一次大谷探検隊のメンバーの中に、島地大等という人がいます。この人は、日本仏教学の礎を作ったと言ってもいいぐらい、日本仏教を学ぶ

うえでの基礎を作り上げた人です。しかし、日本仏教学を専門とする人でも、島地大等が大谷探検隊のメンバーであつたことを知る人は非常に少ないのが現状です。

今日お配りしたプリントに出ています。島地大等は、一九二八年に、『聖典 浄土真宗』を明治書院から出版しています。聖典ですから、まず、浄土三部経があり、親鸞聖人の著作、蓮如上人の書いたものが続きます。そのあと、聖徳太子の十七条憲法、そして、一番最後に、アショーカ王の法勅文が和訳されて載っています。

島地大等は、大谷探検隊のメンバーとして自らインドに行つて、アショーカ王の法勅文の拓本を取つて帰つた人物です。大谷探検隊は、アショーカ王の偉業を最初に見出した日本人です。

(一) 廃仏毀釈と近代西欧文明の衝撃

大谷探検隊は、浄土真宗第二十二世宗主となる大谷光瑞師が率いた調査隊であるために、「大谷探検隊」と呼ばれますが、大谷探検隊を語るうえでまず欠かせないのが、光瑞師の父である大谷光尊師（明如上人）です。

わが国は、明治時代の初めに廃仏毀釈という、仏教界にとって非常に大きな打撃を被りました。浄土真宗は明治の新政府を支援していましたが、梯子（はしご）段をはずされたようなかたちで、多くのお寺が被害を受けたのです。仏教界全体が危機に瀕していったときに、いち早く西欧社会に目を向けたのが大谷光尊師です。今後の仏教界は仏教者育成こそが大切であるということで、西欧社会の教育システムに着目したのです。自身はヨーロッパに行きたいという思いを強く持っていました。父の広如上人が体が悪いということで、光尊師自身は国内にとどまりヨーロッパに行くことはありませんでした。そこで、後に明治の仏教界の重鎮となる若き島地黙雷を派遣します。

そして赤松連城も派遣します。赤松連城もやがて仏教界の重鎮の一人になりますが、とりわけ教育面に関しては、

赤松がヨーロッパの教育制度をつぶさに見てきて、その実態を明如上人に報告するのです。龍谷大学大宮学舎の本館は今、重要文化財になっていますが、一見してわかる通り、和風の建造物ではありません。外観はイギリスのオックスフォード大学ないしはケンブリッジ大学の神学校を模したものであると言われています。外観は西欧風で、中身は中央に阿弥陀如来を安置した礼拝堂。赤松の報告を受けた光尊師の構想が形となったのです。

浄土真宗は明治時代にいち早く西欧の教育に着眼して、いいところをどんどん摂取していきます。西本願寺は、教育面に関しては日本政府と競い合うかのような足取りをたどっていて、京都の学林がのちの龍谷大学になります。が、この時期、中心となる大教校、全国七カ所に中教校、各県に小教校を配置しました。

大教校のときに、一般の在家の人々にも門戸を開くというので普通教校ができます。大教校と普通教校を統合し大学校を設立したときに、文学寮というのがあります。第一次の大谷探検隊は、文学寮にいた元教授とその教え子たちからなる調査隊です。

この時代、普通教校、文学寮の二つで非常に特殊な教育がなされていました。ついでに言っておきますと、学寮として一六三九年に始まる浄土真宗僧侶養成機関は、この時期を経て、佛教大学と名を改め、そして、大正十一年に龍谷大学となるわけです。さて、普通教校ですが、その中にこのとき反省会という組織ができます。一説によれば、この当時、仏教を教える先生はお酒ばかり飲んでいて、学生から反省を促す声が沸きあがったと言います。同志社大学から普通教校に教えるクリスチャンの非常勤の先生は非常に清廉潔白で、学ぶべき点が多いけれども、うちの僧侶の先生方はお酒ばかり飲んでいるということで反省を迫ったというのです。

「反省」という言葉が日本語として生まれたばかりで瑞々しかった頃のことです。反省会という組織が出した雑誌『反省会雑誌』で、これが今の『中央公論』となるのです。『中央公論』の前身である『反省会雑誌』に、多

くの若者が寄稿をしています、その若者たちは世界に目を向けていました。スリランカの上座部仏教がどのようなものであるのか、チベットではいかなる仏教が伝わっているのかといった、非常に好奇心旺盛な若者たちの文章にふれることができます。

その中に高楠順次郎という人がいて、彼はオックスフォード大学に留学します。マックス・ミュラーに師事してサンスクリットを学びます。帰国して東京帝国大学、いまの東京大学ですが、そこで教鞭をとり、梵語学講座を創設します。高楠順次郎といえば、仏教を研究するうえでの基礎文献である『大正新脩大藏經』や『南伝大藏經』の刊行に当たり中心的役割を果たした人物として知られています。まさに国際的仏教学者でした。さらには女子教育にも力を注ぎ、武蔵野女子学院（現在の武蔵野大学）を設立しています。今ご覧いただいている写真は高楠がヨーロッパでの留学を終え、普通教校に戻ってきたときの記念写真です。

（二）文明のありようを問う明治の学僧

この時期の浄土真宗の若き僧侶たちが世界に飛び出ていきますが、中でも、ギメ東洋美術館で報恩講を行った僧侶が二人います。この報恩講は、ヨーロッパにおいて浄土真宗の儀式が行われた最初です。これは、エルトゥール号というトルコの軍艦が和歌山県串本沖で座礁するという事件に関連するものです。エルトゥール号が串本沖で、台風で座礁し、多くのトルコの軍人が亡くなります。一部のトルコの軍人が、串本町の人たちの厚い看護によって助けられます。

その助かったトルコ人を、日本の軍艦二隻がトルコに送り届けます。その辺りのことは、司馬遼太郎の『坂の上の雲』（文春文庫）の第一巻の最後のほうで少しだけ出てきます。トルコ人たちを乗せた日本の軍艦がスリランカ

に着いたとき、スリランカで浄土真宗の二人の僧侶が上座部仏教の勉強をしていました。

トルコの人たちはイスラームの人たちです。仲間を失って意気消沈しているイスラームの兵士たちに日本人僧侶が法話をしたところ、彼らは非常に喜んで、勇気づけられ、「一緒にトルコに来てください」と要請をします。その二人は軍艦に乗り込んで、トルコに行きます。軍艦の中でも話をして、トルコの兵士たちを勇気づけたといえます。

串本でトルコの軍艦エルトゥールル号が遭難した地は、今、公園になっていて、ここで多くのトルコ人が亡くなったという碑が建っていますが、その碑を書いたのが大谷光瑞師です。弔魂碑と呼ばれています。仏教者は魂ということは言いませんが、恐らく、イスラームの人たちということで、あえて「魂」という言葉、魂を弔うということを使ったのではないかと思います。

若き日本人僧侶二人はトルコからフランスへ入ります。二人の浄土真宗の僧侶がフランスに来たとき、ギメ東洋美術館の創設者であるエミール・ギメが、「二人の浄土真宗の僧侶がフランスに来た。ぜひ、ギメ美術館に招いて、浄土真宗最大の仏教行事である報恩講をやってもらいたい」と、二人をお願いをするのです。二人の僧侶のうち、善連法彦は浄土真宗仏光寺派、もう一人の小泉了諦は誠照寺派です。二人は『反省会雑誌』にも寄稿しています。

このときの報恩講で読まれた表白文が、今現在、ギメ東洋美術館に残っていますが、中身がすごいのです。報恩講には、フランスの首相や、「踊り子」を描いた画家のエドガー・ドガまで参列していました。政界、財界、芸術家の面々が居並ぶ前で善連法彦は堂々と表白文を読み上げました。

「謹ンテ弟子法彦、十方三世ノ如来ト、開祖見真大師ノ尊前ニ白シテ白サク」と始まり、自分たちがパリに来て、まず、パリの文明に驚いたことを次のように述べます。「巴黎（＝パリ）ハ、是有形文明ノ積極ニ達セル無双ノ大

都府ナリ」と、パリが他と比べることのできないほど文明の極みに達していると驚きを素直に表明しています。

ところが、そのあと、善連法彦は、「何ゾ無形ノ道心モコレニ伴随スルコトナクシテ可ナランヤ」。つまり、物質文明がこのまま突き進んでいったらいったいどうなるのだ。そこには「道心」というものが一緒にないと、危険なことになりはしないかということを、正々堂々と述べています。

つまり、この当時、浄土真宗の一部の若き僧侶たちは、近代文明の罨、近代文明の落とし穴に気が付いていました。だからこそ、仏教を学ぶ必要があると痛切に思っていたのです。真実を見つめる心をなおざりにする近代文明の大きな大きな落とし穴が見えていたのです。豊かさをひたすら追い求める近代文明の罨に気付いていた善連法彦ではありましたが、彼は若くして亡くなっています。

(三) 大谷光瑞のロンドン遊学

近代文明の危うさに気が付いていた人たちの流れの中に、大谷光瑞師は位置付けられます(写真1)。光瑞師は、



1. 大谷光瑞
龍谷大学大宮図書館蔵

父の光尊師のヨーロッパで学問、研究をするという夢を叶えます。光瑞師の、ロンドンを中心としたヨーロッパでの動きを見ないことには、大谷探検隊は語れません。大谷光瑞師を中心とする大谷探検隊に対しては、わが国では誤解が渦巻いていて、いまだにご門主の道楽という観点でしか見られていない面が強いのです。

大谷光瑞師は、ヨーロッパでさまざまな学問研究にふれますけれども、とりわけ宗派の立場を超える仏教の研究を目指していま

した。漢訳經典にたよる日本仏教の限界を知り抜いていましたから、原典指向が強まっています。ヨーロッパの仏教学者や東洋史関係の学者とも盛んに交流を行います。仏教学と並んで、光瑞師のもう一つの主軸は地理学でした。世界に対する関心がたいへん強く、宗教のみならず、民族、文化、環境についても並外れた好奇心を抱いていました。地質学、気象学、さらには植物学にも触手を伸ばしています。博覧強記は光瑞師の大きな特徴です。

いったい世界はどうなっているのか。光瑞師の関心領域は実に広いものでした。今、龍谷ミュージアムで展示している「二楽荘と大谷探検隊」では、入口を入ってすぐのところに世界地図を掲げています。光瑞師の命を受けて若者たちが世界各地へ赴いている様を俯瞰してもらおうという趣向です。アフリカに行った者もいます。南洋に向いた者もいます。さらには南米にまで行った者もいます。大谷光瑞という人は世界を見渡そうとしていたのです。この時期、破格の宗教者です。

(四) 地理学者としての大谷光瑞

大谷探検隊といえばシルクロードのイメージが非常に強いですが、シルクロードというのは、彼の射程圏では一部にすぎません。大谷光瑞師は、最初、ヨーロッパでは地理学者として知られていました。地理学者大谷光瑞という紹介をされているのです。

その当時は、ヨーロッパでは地理学者たちがシルクロードに行つて、続々と仏教寺院跡を見出していた時期で、スヴェン・ヘディンあるいはオーレル・スタインといった人たちの成果を、光瑞師はロンドンに行つて目の当たりしていました。

キリスト教徒の人たちがシルクロードに行つて調査をしてみると、ほとんどが仏教遺跡です。これこそ、仏教徒

としてのわれわれがやる仕事ではないかという使命感が膨れ上がっていきます。

これはロンドンで研究をしているスナップ写真です。三人の男が写っています。大谷光瑞師のお目付け役の藤井宣正、そして、第一次探検隊で中国・新疆に入った堀賢雄。そして光瑞師。藤井は元文学寮教授。堀は藤井の教子。インド・中央アジアに赴くことになる第一次大谷探検隊の構想を練っていたのかもしれませんが。

光瑞師はロンドンに来る前に、イギリスの王立地理学協会の会員に推挙されています。中国旅行のレポートが王立地理学協会に認められて会員となったのです。王立地理学協会というのが、オーレル・スタインのシルクロード調査の元締ともいうべき存在で、光瑞師はロンドンでシルクロードに関する生の情報を得ることができたのです。ただ、世界を広く見渡すという発想は、その当時の日本人にはほとんど理解できませんでした。大谷光瑞師の考えを理解した最初の人物は、恐らく小川琢治であったと思います。京都大学地理学教室の初代プロフェッサーになった人です。

彼は国費留学でロンドンに来ていて、光瑞師がこれからシルクロードへ調査に行くことを聞いて、ぜひ自分も参加したいという思いを持ちますが、自分は国費留学の身であるから、日本へ帰らなくてはいけないと非常に残念があります。彼の自叙伝にそのあたりのことが出てきます。小川琢治の名前は最近ではほとんど出てきませんが、地理学者として非常に著名な方でした。この人こそ、わが国で最初のノーベル賞を受賞した湯川秀樹博士のお父さんです。

龍谷大学のお宝の一つに「混一疆理歴代国都之図」がありますが、これはモンゴルの世界観を示したもので、十四世紀頃に作成された世界地図です。アフリカと日本が描き込まれている世界地図としては、最古のものになります。光瑞師はこれを大切にしていたですが、後年、小川琢治が、この地図は非常に貴重な地図だから、ぜひ模写を

させてくださいと言って模写をして、今、その模写をした地図が京都大学のお宝の一つになっています。

光瑞師の世界を見渡すという構想は、残念ながら、その当時の日本人にはほとんど理解されていませんでした。

面白い新聞記事を紹介しましょう。一九〇八年、第二次大谷探検隊が発見した年の新聞記事に、「西本願寺の大谷光瑞伯は、地理狂と言われるほど熱心な研究者であるが、これは別に何らの目的があつてするのではなく、一種の道楽であるような」と出ました。

光瑞師は懸命に各時代の世界地図を収集し、人類の世界認識がどのように変化していったかということを研究の対象にしていましたけれども、世間は全くと言っていいぐらい理解していませんでした。光瑞師の考えを理解する人が非常に少なかったというのが、大谷探検隊の一つの不幸であつたと思います。

(五) 第一次大谷探検隊

一九〇二年八月、第一次大谷探検隊がロンドンから出発します。大谷光瑞師、本多惠隆、井上弘円、そして、中国・新疆を調査することになる渡辺哲信、掘賢雄の五名が初期のメンバーです。今日お配りした特別展「二葉荘と大谷探検隊」のチラシをご覧ください。一番下の写真は、世界の尾根といわれるパミール高原を越えるときのスナップ写真で、今回が本邦初公開です(写真2)。帽子をかぶった者たちが大谷探検隊の若いメンバーで現地の人たちとの記念写真です。一人だけ写っていない人がいます。光瑞師です。ですから、この写真は、まず間違いなく光瑞師が撮った写真です。

艱難辛苦をしてパミール高原を越えて、二手に分かれます。インドへ入るグループと、中国新疆へ入るグループです。そして、応援部隊が駆け付けます。インドの調査は総勢十一名のメンバー、そして、さらに五名の別動隊が



2. パミール高原の大谷探検隊 龍谷大学大宮図書館蔵

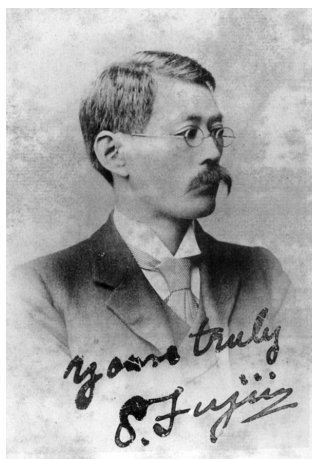
ビルマ、中国南部へ入ります。第一次大谷探検隊は全部で十八名です。

これまでは、ビルマ、中国に入った人たちのことがふられることはほとんどありませんでした。この中で野村礼讓という人は、大谷探検隊の隊員となる前は、文中女学校（京都女子大学の前身）で地理と数学を教えていた先生です。つまり、大谷探検隊の中には、ここ京都女子大学に関わりのある人物がいたということです。どうか、ご承知おきください。さらにもうひとり、前田徳水は、のちのち京都女子大学の理事になった人です。

大谷探検隊の調査は、仏教伝来の跡を探るというものが、単なる伝来ルートの調査ではなくて、仏教が伝わった地域はどういう地理的な環境にあったのか、そしてどういう状況下で仏教は栄え、どういう状況下で廃れていったのかという問題意識を持って臨んでいました。

（六）藤井宣正

第一次大谷探検隊の仏教遺跡調査で主導的な役割を果たし



3. 藤井宣正 長野・真宗寺蔵

雲』には傑物が揃っていた予備門のことが出てまいります。

藤井宣正は、仏教界にあつて、その当時としては非常に最先端を行く学術研究をしています。わが国で最初に、インドの仏教遺跡を本格的に調査したのは間違いなく大谷探検隊で、学術面で主導したのが藤井宣正です。藤井はアジャンター、エローラをはじめとする石窟寺院の調査にはとりわけ力を入れました。残念ながら大谷探検隊の調査報告書は失われてしまつて、今日残つてはいません。調査内容を知るには隊員の日記や書簡が有力な資料となります。

インドの仏教遺跡については、大谷探検隊以前に、イギリス人が主導したインド考古局が調査を行つておりました。藤井はそれらを読み込んで調査に臨んでいます。アジャンター石窟では、グリフィスの刊行した大型図録を携えて調査をしています。綿密な実証研究を藤井は目指していました。

藤井宣正のアシスタントをしたのが、最初にご紹介しました島地大等です。藤井宣正は、腸に疾患を抱えていました。彼の日記を読むと、いつもおなかの調子が悪くて、「今日も下血」というのが頻繁に出てきます。無理がた

たのが、藤井宣正という人です（写真3）。この方は、仏教学、仏教史学、そして、仏教美術のスペシャリストで、パリで万博があつたときに、日本の仏教美術の写真集が出品されますが、その解説を書いた人でもあります。藤井は、西本願寺が東京帝国大学に送り込んだ内地留学生の第一号で、東京帝国大学の予備門では夏目漱石と同級生でした。この時期、予備門には、南方熊楠、正岡子規がいました。秋山好古・真之の兄弟を描いた『坂の上の

たったのか、この調査のあと、フランスのマルセイユで亡くなっています。藤井宣正という偉大なる学者のことはほとんど知られていません。龍谷大学でも藤井宣正のことを知っている人はわずかです。

藤井宣正という名前を歴史の闇から引き上げたのは、島崎藤村の研究者たちです。藤井の遺跡調査に関することをいま、ご紹介しましたが、その情報源は藤井の『印度靈穴探見日記』です。この日記を、島崎藤村研究グループが明るみに出します。なぜ島崎藤村と結びつくかというと、若き島崎藤村は藤井宣正をモデルにして小説を書いているのです。

藤井はインド調査の折、日本にいる奥さんに何枚も絵ハガキを出していました。藤井が亡くなった後、奥さんの里である長野の真宗寺に寄宿していたのが島崎藤村でした。

藤村は住職から、「うちの娘婿はインドへ行って仏教遺跡の調査していたのだが、亡くなってしまった」と絵ハガキを見せられます。そのとき藤村にインスピレーションがわいて、彼は『椰子の葉蔭』という書簡体小説を書きます。後に島崎藤村は、『破戒』、『夜明け前』という大作を書きますが、長野の真宗寺というお寺は、『破戒』に登場する蓮華寺のモデルともなりました。

真宗寺に、藤井宣正の日記が残っていたのです。一九七〇年代、『島崎藤村研究』という雑誌に、三井文彦氏が「藤井宣正日記」と題し連載をして紹介をしたのが『印度靈穴探見日記』であつたのです。この日記を読めば、大谷探検隊が入念なる学術調査を行っていたということがよくわかります。

藤井宣正はインドの仏跡調査をしています。調査の終盤で、東インドから南インドへ向かいます。そのときに姉崎正治が同行しています。姉崎正治は日本における宗教の祖であり、東京大学の教授となつた方です。日本宗教学は、姉崎正治から始まります。この方はドイツへ留学して、藤井宣正のことをよく知っていました。藤井宣正

の著書『佛教小史』の書評を書いています。姉崎は藤井のことをこよなく尊敬していました。二人はスリランカで別れ、姉崎は日本へ帰り、藤井はもう一回ヨーロッパへ行くことにしてフランスのマルセイユで亡くなったのです。はからずも、藤井の命を懸けた調査の最後の目撃者となったのが姉崎正治でした。

(七) 蘭田宗恵

藤井宣正と並んでもう一人、元文学寮の教授が大谷探検隊に参画しています。蘭田宗恵です。蘭田宗恵は、サンフランシスコに向いて北米開教使になった人です。文学寮からアメリカへ行って、浄土真宗を広めることに尽力をした方です。

私は、ここが非常に面白いところだと思っています。つまり、未来に向かって、伝道布教をする開教というレベルと、いにしえの仏教の歴史、過去を探るというのが、その当時の浄土真宗では同一地平で見られていた。今、開教使を目指す人が、アフガニスタンの遺跡調査に行こうか、ということにはなかなかありません。

ところが、この時期は、伝道布教を志す人が遺跡調査をしました。蘭田宗恵は大変な調査をしていて、インダス川流域を単独で源流の方に上っていき、インダス川流域の仏教遺跡調査をしています。そして、ガンダーラに入り、多くの仏像を収集し、ここでは大谷光瑞師と合流してともにガンダーラの調査をしています。蘭田宗恵がガンダーラで収集した仏像は、今現在、旅順博物館に所蔵されています。

(八) アショーカ王への関心

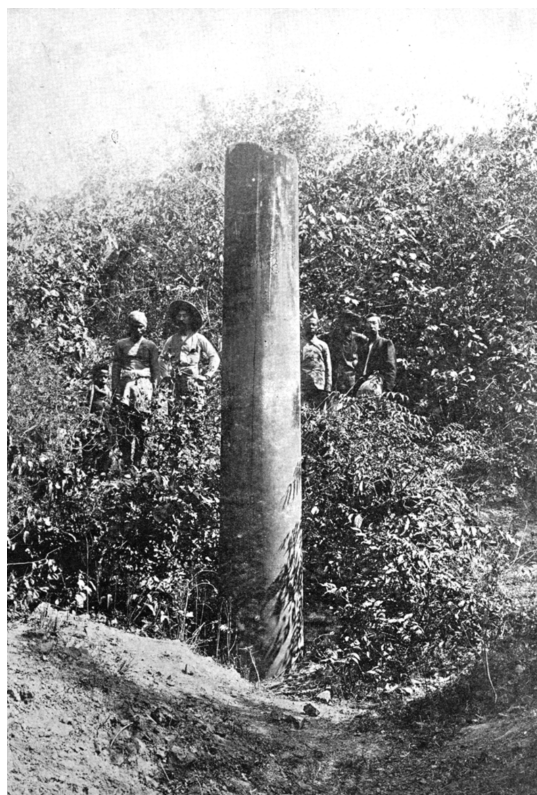
第一次大谷探検隊のインド調査では一番時間をかけたのが王舎城です。全員がここで集結をしています。釈迦ゆ

かりの地もさることながら、大谷探検隊のインド調査で目につくのが石窟調査とアショーカ王の事蹟調査です。石窟に対する関心は藤井の日記に明らかで、彼の日記のタイトルにもなっている「靈穴」は石窟のことを指しています。当時、石窟というタームがまだ定着しておらず、不思議な洞窟といった意味合いで藤井は「靈穴」という語を使ったのだと思います。

そして、アショーカ王です。藤井のみならず大谷探検隊の隊員が等しく関心を抱いていたのがアショーカ王碑文でした。大谷探検隊の調査地域はその当時発見されていたアショーカ王碑文の所在地と重なります。大谷探検隊の若きメンバーは手分けして、アショーカ王碑文を訪ね歩き、碑文の拓本採取を試みたのです。一例をあげましょう。これはルンビニーのアショーカ王柱です。釈迦が誕生したルンビニーでアショーカ王柱が見つかったのは一八九六年。ドイツ人考古学者フューラーが発見しました。石柱にはアショーカ王が法勅文を記していました。アショーカ王は仏跡巡礼の一環でルンビニーを訪れ、法勅文を記したのです。この碑文は、釈迦がこの世に実在したことを確実なものとしました。ルンビニーのアショーカ王柱が発見されてその六年後に日本人として初めてルンビニーに行ったのが大谷探検隊の清水黙爾と井上弘円でした。いまお見せしている写真は石柱を中心にして撮った記念写真です（写真4）。

大谷探検隊の若きメンバーたちは、藤井宣正あるいは蘭田宗恵に指導を受けながら、石柱や岩石に刻まれたアショーカ王の法勅文の拓本を取って帰りました。今、この拓本は、龍谷大学の大宮図書館に所蔵されています。

十九世紀の後半、ヨーロッパの学術世界ではアショーカ王碑文の解説が注目を浴びていました。次々とアショーカ王碑文が解説されていたのです。それらの成果をふまえた、ヴィンセント・スミスの『アショーカ王』という書物が、大谷探検隊がロンドンを出発する直前に出版されています。大谷光瑞師をはじめ、大谷探検隊の主要メンバ



4. アショーカ王柱の立つルンビニーでの
大谷探検隊 龍谷大学大宮図書館蔵

ーはアショーカ王に関する最先端の研究成果を十分勉強したうえで現地に行っています。

わが国でアショーカ王の法勅文が和訳で一般に公開されるのは、東京大学の宇井伯寿の「阿育王刻文」、一九二七年のことです。それよりはるか二十年以上も前に、大谷探検隊はアショーカ王の法勅文の重要性に気付いていたのです。

たとえば、「政治とは、人民のために力を尽くすこと」とか、「政治とは、衆生から受けている債務の返還」ということが読み取れます。政治権力者というのは、生きとし生けるものから借金をしているに等しい存在で、その借金を返す行為が政治だと言うのです。今の政治家のみなさんに聞かせたいですね。

アショーカ王は貧しき者たちのために「施しの家」の設置を行ったり、それから、病院を建てたりしています。それも人間のための病院だけではなく、動物のための病院を造っているのです。動物愛護の精神はすでに古代インドに生まれています。そして、辺境の異民族を保護すべし、ということも言っています。また、アショーカ王は仏

教に強い影響を受けたとはいえ、仏教以外の宗教も保護せよと命じています。こうしたことなどがアショーカ王の碑文から読み取れるのです。

（九）大谷探検隊と森鷗外

この時期、大谷探検隊ともう一人、アショーカ王に関心を示した日本人がいました。それが有名な作家の森鷗外です。森鷗外は文豪であり、医者であるところまではよく知られていますが、実はもう一つの顔があり、仏教研究者でもありました。彼は、ドイツの留学から帰る途中にスリランカに寄って、スリランカの仏教遺跡をくまなく見て回っています。仏教に対して関心が非常に高かった人です。

わが国でアショーカ王のことを最初に出版物として出したのが森鷗外です。密教学者の大村西崖と共著で出した『阿育王事蹟』という書物です。『阿育王事蹟』でレンビニーのアショーカ王柱の写真が出てきます。これは先ほど紹介した大谷探検隊の写真です。ものの見事に背後の人物を消しています。

どういうことかという、森鷗外が大谷光瑞師に連絡を取って、大谷探検隊の写真を使わせてくれとお願いして、光瑞師が許可をしたのです。このように大谷探検隊の関心領域は、森鷗外とか、あるいは小川琢治とか、のちほど紹介する建築界の大御所となる伊東忠太と重なります。

（十）大谷探検隊と伊東忠太

第一次大谷探検隊は、一九〇二年からスタートしましたが、調査は広範囲にわたっています。インド、中央アジア、東南アジア、そして中国の雲南・四川・貴州。

伊東忠太は、その旅行から帰ってきて光瑞師と接触を持ちますが、それは、大谷探検隊の若きメンバーとの出会いがきっかけであり、二人は、趣味も考え方も非常に近く、昵懇（じっこん）の間柄になります。

伊東忠太は、その後、西本願寺前の真宗信徒生命保険株式会社の社屋、今の伝道院の設計に携わりました。そして、東京の築地本願寺は、世界に二つとない建物で、大谷光瑞師と伊東忠太の合作と言っているぐらいです。東京に行かれたら、ぜひ築地本願寺に行ってください。



5. 伊東忠太と大谷探検隊（真ん中が伊東忠太、向かって右が野村礼讓）『伊東忠太建築文獻』第5巻より

実は、中国の雲南へ入った隊員と伊東忠太が、全く偶然に出会っています。残念ながら、伊東忠太という名前を聞いて、ピンとくる人も少なくなりつつあります。京都の平安神宮を設計したのが、伊東忠太です。伊東忠太は、法隆寺の柱の真ん中が膨れているのは、ギリシアのエンタシス式柱が源流であるという説を唱えました。それを実証しようと、中国へ入り、中国からインドを経由してトルコ・ギリシアを目指しました。中国で雲崗石窟を見出して、意気軒高、得意の絶頂にあったところへ、貴州省と雲南省の省境で大谷探検隊のメンバーに出会いました。さきほど紹介した、この京都女子大学の前身である文中中学で教えていた野村礼讓と茂野純一が伊東とばったり出くわし、意気投合するのです。今回の特別展で、彼らの記念写真を展示しています（写真5）。本邦初公開です。伊東はこのとき、大谷光瑞師の遠大なる構想に衝撃を受けるのです。

この時期の建築家は、思想を具体化しました。二樂荘にしても、伊東忠太が助言者となり、伊藤忠太は二樂荘を「本邦無二の珍建築」と評しました。

（十二）大谷探検隊とシルクロード（中国・新疆）

中央アジアに目を移します。大谷探検隊といえばシルクロードのイメージがあまりにも強いですが、第一次大谷探検隊では二人の隊員が入りました。現在の中国新疆ウイグル自治区。中央にタクラマカン沙漠があります。周辺にオアシス都市があつて、そこに、今、廃墟となつている仏教寺院が点在しています。その廃墟となつた仏教寺院が続々と見つかつていた時代です。

渡辺哲信と堀賢雄の二人は、光瑞師とともにヨーロッパへ出向いて勉強していました。特に堀賢雄は、オックスフォード大学で地理学を専門に学んでいて、測量技術、発掘技術さらには気象学を修めていました。現在、東京国立博物館に所蔵されている、コータン出土の青銅製の仏像はふたりが日本にもたらしたものです。極めて学術的に価値の高いものです。

彼らはクチャで時間をかけて調査をしています。彼らの撮つたクチャのバザールの写真です。私が一九八〇年代に行つたときも、同じようなバザールがありました。スバシ遺跡では、現地の人間を使って発掘調査を行つています。この時期、日本ではまだ考古学は生まれていません。日本で考古学が生まれる前に大谷探検隊が考古調査をしたので、わが国で最初の発掘調査をしたのは大谷探検隊ということになります。

大谷探検隊は、シルクロード各地域から非常に重要度の高い出土文物をよりすぐつてもたらしました。有名なものでは、大谷探検隊を特集する雑誌などで必ず採り上げられる大型の舍利容器があります。連珠文の中に童子がい

て、羽が生えています。森永製菓のキャラメルの箱に描かれていたエンジェルです。シルクロード出土文物の中には、東西交流の跡がはっきり見て取れるものがあり、注目されます。西方的な要素と東方的な要素が入り混じっているのが、非常に面白いところです。

大型の舍利容器には、二十一人の人物が表現されています。非常に特徴的な、明らかに動物の仮面を着けて、子どもが吹く笛に合わせるかのように踊っているダンサーと、ミュージシャンがいます。とても大きな太鼓をたたいている者もいます。

以前、このミュージシャンとダンサーから成る二十一人の集団はいったい何を表現しているのかを調べたことがあります。実は、クチャは、いまでも音楽とダンスが盛んなところで、中国の歴史書では、「亀茲楽」という名称で知られています。

唐代にできた仏教の百科事典とも言うべき『一切経音義』の中に、「蘇莫遮（そまくしゃ）」という演目についての面白い記述があります。「このパフォーマンスは、西の方、亀茲国に出ずる」と。亀茲国とはクチャのことです。亀茲国で演じられる演目の一つに「蘇莫遮」というのがあり、「蘇莫遮」の特徴は、獣の面を着けることだということです。ですから、大型の舍利容器の獣の面を着けて踊っている絵と、『一切経音義』に出てくる「蘇莫遮」の記述が一致するのです。つまり、大型の舍利容器に描かれているのは、亀茲国（クチャ）の代表的な音楽の演目の一つということになります。

さらに興味深いのは、これが、実は日本に伝わっているのです。大阪の四天王寺で今も踊られている雅楽の演目に「蘇莫者」があります。「しゃ」の字は違いますが、ともに「そまくしゃ」です。ここでも獣が重要な役割を果たします。四天王寺では、聖徳太子の吹く笛に合わせて猿が舞います。日本と遠く離れたシルクロードのクチャで、

おそらく、お寺でもってそういう伎楽（ぎがく）が行われていて、それが、はるばる日本にまで伝わったということになります。

今日の講題を「文明としての仏教」と付けましたが、文明は、ある特定の地域だけで通用するのではなく、広く伝わります。伝播力があるのです。二十世紀になって、civilizationの訳語に「文明」が使われ、cultureの訳語に「文化」が使われました。あえて大雑把に言うと、ローカルな文化、そして、グローバルな文明ということになります。このように、シルクロードで流行っていたパフォーマンスが、中国、朝鮮半島を経て日本にまで伝わりました。仏教は、教義も伝え、ローカルな踊り、音楽も伝えたのです。いま果たして仏教は伝播力を持ち得ているのでしょうか。

一九〇八年からは、第二次調査隊が繰り出されます。第二次大谷探検隊は、橘瑞超と野村栄三郎の二人がシルクロードに派遣されました。モンゴルで画期的な成果をあげてふたりは新疆に入ります。橘瑞超は、楼蘭で大変な発見をしました。「李柏文書」と言われるものです。「李柏文書」は、現在、龍谷大学にあり、重要文化財に指定されています。

紙は中国で生まれましたが、古い紙は、戦乱に次ぐ戦乱のため、今、中国内地に残っていません。ところが、乾燥地帯、いわゆるシルクロード地帯では、乾燥しているがために古い紙が残りました。橘瑞超は、紙が普及する頃の紙を見つけ出しました。これは、正式名称は「李柏尺牘稿」と呼ばれるもので、手紙の下書きです。前涼国の使者が西域諸国を歴訪するについて、西域長吏の李柏が符太に持たせた手紙の下書きが残っていて、橘はそれを見つけました。約四世紀の、紙が普及していく頃の初期の遺品であるところから、非常に価値あるものとして重要文化財に指定されました。

私が、大谷探検隊の中で常々不思議に思っていたことがあります。大谷探検隊は、どうしてシルクロードの調査をスムーズに遂行することができたのかです。楼蘭に行くといっても、今でこそ、JTBがあつて、いろいろな旅行社があつて情報がありますが、その当時はありません。どうして彼らは楼蘭に行くことができたか。

楼蘭王国は仏教が栄えていたところで、以前に作家の椎名誠がここへ行くというテレビ朝日の正月番組「楼蘭シルクロードに消えた幻の王国」がありました。それ以降日本からの観光客が増えたそうですが、今、楼蘭には近寄れないそうです。中国が核実験をしているからです。中国は、タクラマカン沙漠で核実験を行いますが、楼蘭周辺でも行われて、観光客が入れなくなったという話を聞きました。

楼蘭王国の仏教遺跡を見出したのが、スウェーデン人のスヴェン・ヘディンです。これがヘディンの撮った写真です。ここに明らかに仏塔がありますが、ヘディンは、仏教のことを全く知りませんでした。ですから、彼は、これが仏塔であることに気が付きませんでした。ですが、楼蘭王国から非常に多くの文物を見つけ出し、地理的な調査をきっちりやりました。

そこへ橘瑞超が入り、「李柏文書」を見つけ出したのです。では、橘瑞超は、どうして楼蘭に無事にたどり着くことができたか。スヴェン・ヘディンから情報を直接得ていたからです。ヘディンはインドにいるとき、光瑞師から、日本へ来てくれないかという要請を受けました。日本地理学協会が主体となつてヘディンを東京に呼び、講演会をしました。そのあと、ヘディンは京都の西本願寺へ来ています。

これがそのときの記念写真です（写真6）。向かつて右から二番目が大谷光瑞師、奥さんの籌子、それから和服を来たスヴェン・ヘディン、この清楚な女性が光瑞師の妹である九条武子さんです。後ろに蘭田宗恵がいます。これは書院の前での記念写真です。この当時、西本願寺は、国際的なネットワークを構築していて、光瑞師が、楼蘭



6. 西本願寺を訪ねたヘディン（前列向かって左から2番目がヘディン、右から2番目が大谷光瑞）龍谷大学大宮図書館蔵

がどこにあるかというシルクロードの情報をこの日、ヘディンから直接聞き出して、トルファンにいる橘瑞超に電報を打ち、楼蘭の緯度・経度、そこへの行き方を知らせました。それで、橘瑞超は、無事に楼蘭に行くことができたのです。つまり、大谷探検隊が調査をスムーズに行うことができたのは、確かな情報をきちんとつかんでいたからです。

一方、野村栄三郎は、トルファンのベゼクリク石窟に入っています。野村栄三郎が入ったベゼクリク石窟は、中央アジアで最高級の仏教壁画があつたことで名高いところです。各国の探検隊が壁画をそれぞれ自国に持ち帰ったために、壁画は世界に散在しています。以前、NHKの「新シルクロード」という番組で、私たち龍谷大学とNHKが共同で、失われた壁画を復元するという事業を行いました。二〇〇五年二月に、NHKスペシャル「新シルクロード第二集 トルファン 灼熱の大画廊」で放映されました。

復元した壁画は「誓願図」と呼ばれているもので、ウイグル人がトルファンを統治していた十一世紀頃の壁画群です。復元した壁画の中から一枚を紹介しましょう。向かって右上の部分は現地にかるうじて残っています。右下の部分を大谷探検隊の野村栄三郎が持ち帰り、現在、韓国ソウルの中央国立博物館に所蔵されています。左下部分は、オーレル・スタインが持ち帰って、今現在、インドのニューデリーの国立博物館が所蔵しています。中央部分は失われてありません。各博物館に協力依頼をして壁画のデータを集めました。

ドイツ隊の報告書に、中央部分が残っていたときの報告があり、類似の壁画などを勘案して失われた部分も復元していきました。すると、こういう図が現れました。これは、釈迦の前世の物語で、「燃燈仏授記物語」と言われるものです。燃燈仏授記物語は、中央アジアに広く分布しています。特に、アフガニスタン東部に多いのが特徴です。

これはアフガニスタンから出土して、今現在、MIHO MUSEUM（ミホミュージアム）に所蔵されている燃燈仏授記物語です。どういう話かというと、ひとりの青年―彼が前世の釈迦―が燃燈仏というブツダに花でもって散華供養をしました。自分も今度生まれ変わって燃燈仏のようなブツダとなって衆生救済につとめたいとの誓願を立てます。図では花売り娘から花を買うところ、散華供養をしているところが表現されています。花が上部にあります。

そのとき、燃燈仏の歩く前に泥水がありました。この青年は、仏の足が汚れないように、とつきの判断で、持っていた布切れを泥水の上に広げようと思いました。ところが、布が届きませんでした。それで、彼は、長髪のまげを切って、泥の上に髪の毛を敷きました。その行為を見た燃燈仏は、「あなたは、将来、生まれ変わって釈迦牟尼というブツダとなるでしょう」と予言をしました。「あなたは仏陀となるでしょう」という予言をすることを、仏教

では「授記」と言います。前世の釈迦が誓願をし、過去世のブッダが授記をすることがセットになっています。中央アジアの仏教を見るうえで、「誓願と授記」は重要なポイントになります。この物語の図像的特色は青年が髪を泥の上にしくというところにあります。

青年は自分自身が泥にまみれることを厭いません。自分自身が泥にまみれるのです。そういう人格を、仏教では「菩薩」と呼びます。釈迦は前世において、多くの優れた行為をしました。他者のために。自分の体の肉を与えようとした尸毘王にしてもそうです。

自分の身を刻んでも、あるいは自分の体が泥にまみれてでも、という崇高な話がシルクロードには非常に多く、それを芸術作品に仕立てているのです。燃燈仏授記の物語は広く行き渡り、たとえば、クチャでは木彫が出土しており、膝を屈した青年が、やはり髪の毛を垂らしているのがわかります。トルファンのベゼクリク石窟では、複数の前世の釈迦の話が描かれ、「誓願と授記」に関わる物語のひとつとして燃燈仏授記の物語が表されました。

龍谷ミュージアムがスタートする前に、今度は、壁画が並んでいた空間そのものをミュージアムに復元できないかということで、龍谷大学の古典籍デジタルアーカイブ研究センターが復元に取り組みしました。高さ三・五メートル、幅一・二メートルの原寸大の狭い回廊に華麗な壁画が並びました。今現在、龍谷ミュージアムの二階展示室に常設してあります。まだお越しでない方は、ぜひおいでください。

誓願図の並んでいた石窟寺院はウイグル王家の寺院であつたとみなされています。寺院でウイグル王族の肖像画が見つかっています。誓願図は、一面、授記図です。釈迦が前世で衆生救済を誓います。過去世のブッダが、「あなたは今世でブッダとなるでしょう」と授記をします。だから、誓願図であると同時に授記図です。もしかすると、誓願図の並んでいた回廊は、王族が儀式をする空間であつたかもしれません。

ウイグル人は、今でこそほぼ一〇〇％イスラム教徒ですが、もともとはマニ教徒で、それが仏教徒になりました。そして、ウイグル人は、中国の漢文経典を自分たちでウイグル語に翻訳しています。ウイグル人がトルファンを統治していたときは、仏教が非常に栄えて、石窟という宗教空間にこうした誓願図が並んでいたのです。繰り返しますが十一世紀頃、トルファンで誓願図が描かれました。

日本では十二世紀から十三世紀にかけて、法然上人、親鸞聖人が、阿弥陀仏の前世の誓願に真実を見出しました。阿弥陀仏、釈迦牟尼仏の違いはあれ、ほぼ同時期に仏の前世の誓願に着眼したのは、歴史の妙というか、でも、単なる偶然として片付けられない何かがあると予感しています。

(十二) 大谷探検隊の目的

第三次大谷探検隊へと移ります。第三次は、橘瑞超が、いったんヨーロッパに行き、それからまた中国の新疆に戻って来ます。彼は、ここでもんでもないことを行います。広大なタクラマカン沙漠を南から北へ縦断したのです。これは、現地の人間も絶対にやらないことです。いったん入ると出ることはできないと言われるタクラマカン沙漠。彼は、空前絶後の試みをやりました。ロンドンにある王立地理学協会では、橘瑞超がたどったルートを、いまだに「タチバナルート」と呼んでいます。橘瑞超がそのときに使った地図は、王立地理学協会に大切に保存されています。

橘瑞超という人は、この沙漠を縦断したということで、当時、冒険家の一人としてクローズアップされますが、彼は、何も無謀な試みをしたわけではありません。極度に乾燥したところでも仏教は伝わっています。彼は、乾燥した自然環境がいったいどのようなものであるのかを、身をもって検証しようとしたのです。彼は実に周到な準備を

して、水分補給のために氷の柱を抱いて、沙漠に乗り出し、縦断を見事に成し遂げました。

橘瑞超が一時、行方不明になるという事態になり、吉川小一郎という人が、橘瑞超の搜索も兼ねて日本から派遣されます。二人は敦煌で劇的な再会を果たします。吉川も画期的なことを行いました。当時、誰も入ることのなかった墓の調査を最初にやりました。墓の中に入り、「伏羲・女媧図」と言われる図を見つけます。ミイラとなった遺体の上、あるいは石室の天井に「伏羲・女媧図」は掛けられていました。今回の特別展「二楽荘と大谷探検隊」の展示では、入ってすぐのところに「伏羲・女媧図」を展示しています。吉川がもたらしたものです。

吉川が、トルファンのアスターナで、打ち捨てられた、誰も顧みることのなかった墓を調査しましたが、そのあと、オーレル・スタインが徹底的に調査しました。今、ニューデリーの国立博物館に行けば、「伏羲・女媧図」がずらりと並んでいます。

吉川は、結果的に、大谷探検隊のメンバーの中ではかなりの日数をかけてシルクロードの調査をしました。敦煌莫高窟で撮った写真も残っています。ガラス乾板で撮ったものですが、ただし、ガラス乾板の数は限られています。フラッシュはありません。どうやって石窟内の暗い所で写真を撮ったか。火をたいたのです。草を並べ、火をつけて、それをフラッシュ代わりにしました。写真一枚を撮るにもどれだけの苦勞をしているか。

さらに吉川は、植物を採取して持ち帰っています。これも光瑞師の命を受けたものです。光瑞師は、仏教の伝来ルートを探ることが主たる目的でしたが、その地域は、どういう植物、あるいはどういう動物がいるか、どういう地理的環境か、仏教が浸透した地域の生態学的な研究を目指していました。天山麓周辺の百年前の植物標本は、世界でも珍しいとのこと。以前、京都大学の植物学の大家である北村四郎先生が龍谷大学に来て、植物標本をご覧になり、腰を抜かさんばかりに驚かれたそうです。

吉川の大谷探検隊最終局面の写真は、バダインジャン沙漠に行くラクダたちです。ラクダ百四十頭になりました。ラクダの背に載せられた木箱の中には収集した文物が入っていました。

大谷探検隊をはじめ、列強諸国の探検隊は、単なる泥棒ではないかと言う人がいます。一見すると確かにそうみえます。異国の地へ行つて、貴重な文化財を持って帰ったら、これは盗っ人です。ところが、当時、遺跡にある仏像や仏教壁画は、どんどん破壊されていました。ベゼクリク石窟の仏教壁画もそうです。壁画の顔料が農作業の肥料になるというデマが流れていて、農民たちが、それを信じてどんどん壁画を剥がしていました。壁画の中の人物は夜な夜な村を襲いに來るというデマも流れていました。現地の人々はそれを信じてしまい、目を潰してしまいました。例えばドイツの探検隊は、現地に残すべきか、自国に持ち帰って保存すべきか、実は、随分と悩んでいます。ところが、文物がどんどん破壊されている現場を見て、自国で保存するという決断をしたのです。中国でも、列強諸国から多くの探検隊が來て文物を持ち出したので、それほど価値のあるものかということに遅ればせながら気が付いて、文物保存という政策へとつながっていきました。価値に気付くということ。易しいようですが、なかなか難しいことなのです。

今は、各国の探検隊が持ち帰ったものをインターネットで自由に見られるようにしようではないかという動きへと発展しています。「国際敦煌プロジェクト」と言いまして、龍谷大学がその一翼を担っています。

大谷探検隊は三次にわたる探検隊でしたが、調査に行った人たちだけではなくて、それを支えた人たちがいます。そうでなければ、こんな大規模な探検はできるはずがありません。彼らが持ち帰った文物を調査・研究する人たちもいました。大谷光瑞師は、この探検期間中にインドへ数度行っています。そこにお付きの者として参加した人たちもいて、その人たちも仏跡の調査をしています。そういう人たちを合わせると、四十二名です。今回の「二葉荘

と大谷探検隊」の特別展では、展示室を入ったところに、四十二名の顔写真を並べています。

（十三）再検証すべき大谷探検隊のインド調査

大谷探検隊に関して見直す必要がある部分をこれから申し上げます。第二次大谷探検隊で、橘瑞超と野村栄三郎が中国の新疆を調査しました。そのあと、彼らはインドへ入っています。インドのカシミールの首府であるスリナガルという所で、光瑞師と、光瑞師に従ったメンバーたちが待ち受けていて、合流してインドの仏跡の調査に行っています。そのときは、光瑞師の奥さんの簪子裏方も同行していました。

第二次大谷探検隊がインド調査をしたときに光瑞師のグループの随行長を務めたのが、足利瑞義という人です（写真1）。足利瑞義という名前は、大谷探検隊の中にこれまでほとんど出てきませんでした。足利瑞義は、若かりし頃、ロシアに留学しますが、その途中で、第一次大谷探検隊のメンバーとなる渡辺哲信とともにアフガニスタンに入る予定でした。おそらく、その当時、西本願寺にバーミヤーンの大仏の情報もたらされていたと思います。

結局、アフガニスタンには入れませんでした。足利も非常に優れた仏教研究者でした。足利瑞義の姉が、京都女子大学（京女）の創設者である甲斐和里子です。

大谷探検隊が調査をして文物を持ち帰り、二楽荘が神戸に建てられますが、二楽荘の建設にも足利瑞義が大きく関与しています。また、二楽荘に武庫中学校ができますが、その初代校長を務めたのが足利瑞義です。もう一人重要な人物が、京都の明



7. 足利瑞義
広島・勝願寺蔵

覚寺の出身の柱本瑞俊です。柱本瑞俊も足利瑞義と並んで二楽荘での仏教研究のキーパーソンであると同時に、第二次大谷探検隊のインド調査の主要メンバーでした。

これまで、大谷探検隊といえばシルクロードのイメージがあまりにも強すぎましたが、光瑞師は、あくまでもインドを中心にして仏教の拡がりを見ようとしていました。インドの調査に力をいれていたのですが、これまではこのあたりのことはほとんど取り上げられておりません。光瑞師は、のちに『印度地誌』（有光社）という本を出版しますが、これを読めば、彼がどういうスタンスで世界を見ていたかが非常によくわかります。

（十四）研究・教育の拠点としての二楽荘

初めは須磨にあった大谷家の別邸が国に買い取られたので、神戸市岡本（兵庫県神戸市東灘区）に、光瑞師の別邸が新たに造られました。それが二楽荘です（写真8）。二楽荘は、光瑞師の頭の中にあつた世界観を具体化したものです。設計をしたのが鶴飼長三郎という人物であることはわかっています。今回の展示にも、鶴飼長三郎関係の資料を展示しています。そして、伊東忠太が助言をしていました。伊東は二楽荘を評して、「本邦無二の珍建築」と言いました。本当に残念なことですが、もう二楽荘はこの世には存在しません。

二楽荘の壮麗なさまをご覧ください。これが玄関です。庭です。外観も見事なのですが、中身を見て啞然とします。各国の部屋があり、これはイギリス室で、イギリス室は二つありました。これはインド室、これはアラビア室です。どういう仕掛けかわかりませんが、部屋の中に噴水があつて、噴水の前を通ると水が上がるという仕掛けがあつたらしいです。これが中国室です。

何も知らない人がこれを見ると、何と貴族趣味かという印象を持つでしょう。私も初めはそうでした。二楽荘を



8. 二楽荘本館 龍谷大学大宮図書館蔵

見るうえでは、光瑞師の、世界に向ける眼差しを理解する必要があります。光瑞師は、世界を見渡して、特に、若い人たちに世界というものを知らせたかったのです。それで、イギリスあるいはインド、中国という、各国の部屋を配置したのです。今画像で見せているものは、当時の絵ハガキです。二楽荘の各部屋が印刷されています。これまでは、二楽荘の内部についてはこういうものということは、絵ハガキからわかっていました。ただし、部屋の配置はわかっていませんでした。昨年、西本願寺で大きな発見がありました。今回の展示を手掛けた和田秀寿学芸員が、平面図を見つけ出しました。それで、部屋の配置がわかり、今回、龍谷大学の古典籍デジタルアーカイブ研究センターに頼み、部屋をデジタルで復元し、映像を提供しております。ミュージアムのシアタールームでぜひご覧ください。

二楽荘には、武庫中学という教育機関も併設し

ていました。二楽荘全体は、東京ドームが六つ入るぐらいの広大な敷地面積です。そこに、本館、中学がありました。この武庫中学の初代校長をしたのが足利瑞義、二代目の校長先生が、大谷探検隊の第二次、第三次のメンバーの橘瑞超です。ですから、当時の西本願寺は、人材育成を図るという、大谷光尊師（明如上人）の強い意志を受け継ぎ、それを光瑞師が実現したのです。

武庫中学の初代の卒業生の中に、花山信勝という、東大の教授になった人がいます。A級戦犯になった東条英機に最後に接見をして、教えを説いた人です。

二楽荘では、さまざまなことが行われていました。博物館の機能も持っていました。シルクロードで採取した仏教文物を展観するという告知の記事が新聞に出ています。展観当日のようも新聞が取り上げています。黒山の人大かりです。神戸の六甲にどれだけの人が集ったか。これは、日本における最初のシルクロードブームです。一九八〇年代に、NHKの「シルクロード」が喜多郎の音楽で一世を風靡しましたが、それ以前に、六甲でシルクロードブームが起っていました。

ここはまた、橘瑞超を中心とした研究機関でもありました。橘が砂の中から見つけた經典断片の整理・研究が行われていました。『二楽叢書』という学術雑誌を発刊し、橘瑞超が、中央アジアの言語で書かれている經典を研究して、研究成果を公表していました。わが国で最初のウイグル語研究者は、紛れもなく大谷探検隊のメンバーである橘瑞超です。橘は、ウイグル語の仏典の中に『観無量寿経』があることを見出して、漢文の『観無量寿経』から翻訳されたウイグル語訳『観無量寿経』を公表しました。残念ながら、『二楽叢書』は第四号で終わってしまいました。

橘瑞超は、モンゴル語のスペシャリストでもありました。『蒙古語研究』（大阪宝文館）という書物も発刊してい

ます。研究者であると同時に、子どもたちに向けて、少年雑誌で沙漠での体験をわかりやすく語ってもあります。橘は、研究者であると同時に教育者でした。

（十五）仏教精神に基づく女子教育

光瑞師は、二楽荘と錦華殿を往復していました。錦華殿は、今、この京都女子大学にあります。もともとは光瑞師と籌子裏方の新居でした。西本願寺と二楽荘を往復し、二楽荘には含秀居と言われる光瑞師の書斎もあり、そのこと錦華殿を往復していたのです。

ここからが京女にかかわることで、錦華殿はこちらに移築されました。これが移築された錦華殿、そして、錦華殿をバックにした京都高等女学校の生徒たちの記念写真です。これは、京女の入試のパンフレットとかによく載っています。京女の礎を作ったと言われる人が、甲斐和里子です。旧姓足利和里子であり、足利瑞義の姉に当たります。

二楽荘では、そこにあつた武庫中学で男子の教育をし、その校長は足利瑞義がして、京女の礎を作った甲斐和里子は、何度度も言うように、足利瑞義の姉です。つまり、足利姉弟（きょうだい）が、浄土真宗の中での人材教育に大きく貢献したことになります。両名の父親は、足利義山と言います。広島県出身ですが、その当時、当代きつての真宗学者でした。

ですから、二楽荘と京女は姉弟関係です。面白いことに、これまでこのことを誰も指摘していません。今回準備している過程で、京女と二楽荘がこんなに密接な関係であることを、私も改めて思い知りました。甲斐和里子の女子教育という情熱をサポートしたのが大谷光瑞師の奥さまで、仏教婦人会連合本部の総裁をした籌子、そして、妹の



9. 三夜荘での記念写真（後列向かって右から2番目が甲斐和里子、前列向かって左から3番目が大谷籌子、2番目が九条武子） 福井・照恩寺蔵

九条武子でした。大谷家にしても、光瑞師は二楽荘での教育に当たり、裏方と妹君は、こちらで女子教育を支援しました。二楽荘と京女の関係が密接というのは、ご理解いただけるかと思います。

これから、初公開の写真を披露します（写真9）。

甲斐和里子、大谷籌子、九条武子が写っている記念写真です。大谷家の別邸、伏見三夜荘での記念写真です。三夜荘は、今現在も残っています。名前が特定できません。後列右から二番目が甲斐和里子です。前列中央が大谷籌子、まだ嫁ぐ前の九条武子（大谷武子）がここにいます。甲斐和里子、大谷籌子、九条武子が一緒に写っている写真は、非常に珍しいもので、今回、特別展で公開しています。

また、籌子と武子が、一緒に読書をしながら勉強している写真も展示しています。明治の人は本当に勉強熱心であるというのを、今回の展示でぜひ味わってください。

(十六) シルクロード調査終結

このように教育に尽力していましたが、二葉荘は六年間しか機能しませんでした。これは非常に残念なことです。西本願寺負債の問題が急浮上して、光瑞師が門主を辞任するという事態となります。一九一四年のことでした。大谷探検隊シルクロード調査の終結、二葉荘の閉鎖、そして大谷探検隊が命懸けで集めたコレクションが分散していきます。門主の地位を引くということも新聞に大きく取り上げられ、光瑞師は海外に活動拠点を移します。

二葉荘は、その時代の実業界の大物である久原財閥の久原房之助の手に渡ります。日立銅山（久原鉱業所）で「鉱山王」の異名を取り、のちには、通信大臣にまで上り詰めます。久原の母親が敬虔な浄土真宗の門徒で、近くに住んでいたものですから、久原が二葉荘を所有しました。二葉荘が久原の手に渡ったことも、新聞で大きく報道されました。

久原は、シルクロードの文物も手に入れましたが、それを、当時、朝鮮総督府の長官をしていた寺内正毅に譲渡します。寺内と久原は、ともに山口県出身ということで昵懇（じつこん）の間柄でした。

大谷探検隊関係で質問が一番多いのは、「どうして大谷コレクションが韓国の国立中央博物館にあるのですか」というものです。実は、朝鮮総督府の寺内のもとにシルクロードの文物が行って、朝鮮総督府がそのまま韓国の国立中央博物館になったので、大谷コレクションがそこに残り、大谷コレクションのうち、シルクロードの仏教壁画の類が、韓国の国立中央博物館にあるという訳です。博物館は、今は、昔の朝鮮総督府の場所から新しいところへ移転しています。

二葉荘は、久原の手に渡っていましたが焼けてしまっています。おそらく放火ではないかとみなされ、「疑問の出火」ということで、これまた新聞でも大きく報道されました。「本邦無二の珍建築」と称された、近代日本建築の中で

も最高傑作と言われる二楽荘は、この世から消滅してしまいました。

(十七) 仏教学者としての大谷光瑞

光瑞師は、中国の旅順にも別邸を持っていました。これは私が二〇〇二年に行ったときのスナップ写真ですが、そのときはまだ残っていました。ただし、中国南方の蜂蜜職人が勝手に住み着いて、中がひどくなっていて、大連の文物局に保存するようにと強く訴えたら、後に保存することが決定しました。外観を何とかとどめるようにと懇願したのですが、工事中に行ってみると、形が全く変わっていて落胆しました。今は人手に渡ったそうです。

光瑞師が二楽荘を離れたとき、經典写本のたぐいをここへ持ち込みました。大谷探検隊の若きメンバーが、砂の中から経の断片を命懸けで採取しました。はがき一枚程度、あるいは小さいものは切手ぐらいのものに文字が残っていたものを、五十二冊のスクラップブックに貼り、橘瑞超は、それがいったい何経であるか、何の經典であるかをつぶさに調べていたのです。

二〇〇二年に、旅順博物館に、何とかこれを一緒に共同研究をしませんかという申し出をして、調査がスタートしました。このスクラップブックは、完全な形で残っていて、中に橘瑞超のメモ書きが見つかりました。今でこそインターネットで經典が自由に検索できますが、それがなかった時代、本当に心血を注いで仏典の研究にいそんでいた痕跡を見て、私は足が震えました。

旅順がロシアに接収されたことがありましたが、ロシア人もこのスクラップブックの重要性に気が付いていて、これは貴重なものであるということで、青色のスクラップブックに中国語とロシアのスタンプが押してありました。先ほど、休憩中に回収した質問の中に、「ロシアと大英帝国のグレートゲームに大谷探検隊は関係があるのです

か」というものがありました。大あり、そうあり、クロード・チアリです（笑）。大谷探検隊の活動時期というのは、まさにロシアが南下する気配を示していましたし、大英帝国も中国・新疆を狙っているという、その角逐の場に大谷探検隊が挑んでいたのです。グレートゲームの真っ只中に西本願寺が送り込んだ調査隊はいたわけです。

旅順へ行ったとき、大きな封筒がスクラップブックとは別にありました。「それは何ですか。ちよつと開けてみることは可能ですか」と恐る恐る聞くと、「後悔しますよ」と言われました。その通り、後悔しました。中から出てきたのがこれです。本当にごみの山です。ただ、字がかるうじて見えます。これらもおそらく經典断片です。当時のシルクロードの仏教徒たちが写経をした残骸でしょう。

こういうごみでしかないものを、大谷探検隊は持ち帰りました。どうしてか。これらを心のよりどころにしていた人たちがかつていたからです。そのことに思いをいたすわけです。寺が廃墟になっている、壁画がはがれている、経が断片となっている。シルクロードを探検した若き仏教者たちは、ときに涙を流しました。

彼らにとっては、収集した文物は単なる考古学の対象、美術の対象ではなくて、人々の生きた信仰の証であって、それがこういう無残な形になっていると慨嘆したわけです。明治の仏教者は、廃仏毀釈があり、仏教が衰退していくことを非常に恐れていました。仏教がこういう状態になってはいけないという使命感が、彼らには非常に強かったのです。

ここまで持つて帰らなくてもよかったと思いますが、吉川は、打ち捨てられた墓からミイラを持ち帰って、これも旅順博物館で大切に保存されています。旅順博物館には他にインド・ガンダーラで収集した仏教文物が保存されています。

二楽荘が閉鎖になったあとも、研究は続けられていました。光瑞師は、インドでサンスクリット語を学び、光寿

会というサンスクリット仏典写本の研究会を立ち上げています。彼の基軸は、やはり仏教者としての立場でした。

(十八) 興亜計画を構想した大谷光瑞

二楽荘に話を戻します。今回展示していますが、マスキメロンの栽培にわが国で最初に成功したのは二楽荘においでです。光瑞師は、農業に非常に力を入れていました。パスポートの職業の欄に、彼は、「アグリカルチャー」と書いていました。どうして農業にそこまで力を入れたかという辺りは、プリント三ページの「(十四)」を見てください。二楽荘が竣工する二日前、衆会（いまの宗会）が終わった直後に光瑞師が宗徒に向けて発した言葉が残っています。

「仏陀ノ大慈悲ヲ伝ユルノガ今日ノ急務」、二楽荘の建設は、それに連動しています。そのあとが非常に興味深くて、「僧侶ハ直接又ハ間接ニ農事ノ改良ヲ図リ、・・・園芸ノ発展ヲ図ル云フ事モ実ニ急務」であると。つまり、光瑞師としては、日本がどんどん軍国主義化していく、工業化していくことに非常に疑念を持って、日本という国を農業立国にしていきたいということを、本気で考えていました。僧侶たちが、観念的な教えをただ伝えるのではなくて、農業を中心にして、そうして国の発展を図ろうではないかと、それを僧侶に勧めていたのです。将来僧侶が園芸にかかわる、農業にかかわる、その土台作りを二楽荘で指導をしていたのです。

「気象、誠ニモチカライレ」、今、自然災害等が非常に増えています。日本で先駆けて気象観測の重要性をアピールしたのも光瑞師でした。二楽荘に測候所まで造り、近隣の人たちに、明日は晴れというときは白色の光、雨の日は赤色の光という、天気予報までやりました。今回、その証拠も展示しています。

二楽荘を出て以降、農業の育成をインドネシアでやり、さらにはトルコまで行きました。トルコでは、絹織物産

業を興しています。ギョクチェン家というトルコの大富豪と合弁会社を作っていたことが、数年前に明らかになりました。私がトルコへ行ったときに、ギョクチェン家の当主からその辺りのことを詳しく聞きました。今でも光瑞師に恩義を感じていて、光瑞師からもらった日本人形を家宝として大切にしていました。

光瑞師は、晩年、アジアとヨーロッパを鉄道でつなぐことを計画していました。これは、全くの架空の話ではなく、どうも本気で考えていたようです。地理学の成果をいかに発揮して、どこの都市に駅を置くのがベストかということも細かに調べ上げて、鉄道地図を作成しています。彼自身が考えたアジア復興計画です。当時、ヨーロッパが、先進国として近代文明を世界に推し進めようとして、アジアの各地域が、植民地化されていました。日本人も、明治以来、遅れたアジアから脱してヨーロッパに早く追いつくことを合言葉にしていました。

ところが、光瑞師の目から見ると、アジアは、決して遅れたアジアではなく、かつて、仏教が広まっていた、まさに先進的な仏教文明が広がっていた地域でした。その事実を直視して、他地域の仏教徒と連携を取りながら、アジアでの仏教復興を考えていました。

大谷探検隊が進行中の一九〇八年には、西本願寺はダライ・ラマ十三世とも交流をもちます。その後、チベット人の高僧を本願寺に招いて、二葉荘へ住まわせ、日本からは、逆に青木文教、多田等観をチベットに派遣しました。ダライ・ラマ十三世が、「このあと、チベットの仏教を受け継ぐのはこの日本人」と言うぐらい信頼を置いたのが、多田等観でした。多田等観と青木文教については、春の特別展「チベットの仏教世界―もう一つの大谷探検隊」で取り上げました。

(十九)『仏教は科学である』と述べた大谷光瑞の真意

実は、光瑞師は、「仏教は科学である」とエッセーに書いたり、講演で言っています。これはどういうことかと、大谷光瑞師の真意を巡っては、いまだに議論があるところです。

近代の西欧文明は、科学技術文明です。仏教の中には、合理的な精神が充満しています。合理的な精神というところでもって、光瑞師は、近代西欧文明にも伍するという観点で「仏教は科学である」と言った可能性がひとつにはあります。

さらには仏教内部にある科学的側面。古来、インドより、仏教僧が学ぶべき学問として五つの学問（五明）があります。その中には医学もあります。建築学もあります。かつては、僧侶が医術を施すのは、何ら不思議なことではありませんでした。そういう面で、仏教は科学であるというニュアンスで伝えた可能性もあります。

私は別の見解をもっています。光瑞師は「仏教の波及力」に着目したのだと思います。仏教というのは、今、世界全体から見ると、非常に小さな存在と映るかもしれません。ところが、過去は、インドを中心として、中央アジア、東南アジア、アジア全域と言ってもいいぐらいに伝播をしています。これは、西欧の科学技術文明と同等、もしくはそれを凌駕するものであるという確信、それを光瑞師は抱いていました。私は、光瑞師が、「科学」という言葉でもって、仏教は文明であるということを伝えようとしていたと思っています。

現代は「文明の衝突」と言われる時代です。とりわけイスラームが深刻な問題を抱えています。十年ほど前に私はアフガニスタンに出向きました。イスラーム文化圏です、かつて、ここに仏塔がありました。バーミヤーンの西、タンギ・サフエーダックという所です。電気もガスもない村です。一九九〇年代に、ここから一枚の石板が出てき

ました。バクトリア語の碑文でして、ここには、八世紀の初めに仏塔が建立されたことが記されていました。興味深いことに、アラブの勢力がこの地域を支配しているときです。アラブの支配者というと、それは紛れもなくイスラームです。これまで、インド・中央アジア文化圏の仏教の終焉はどのように語られていたでしょうか。イスラームが仏教を駆逐したと語られ続けてきました。

イスラーム勢力が仏教寺院を破壊した事実は確かにあります。けれども、そういった面だけではないのです。イスラーム勢力が支配している地域で、土地の有力者は仏塔の建立を行っている。このことを示す碑文は、はからずも仏教とイスラームの共存を示しています。何年か後には、この碑文は、おそらく文明的観点から非常に重要視されるでしょう。水と油のように捉えられる仏教とイスラームが衝突ではなく、共存をしていたという事例が現れたからには、仏教とイスラームの関係を改めて捉えなおさねばならないでしょう。光瑞師は、イスラームについても多大なる関心を寄せていました。謹んで、この情報を光瑞師に献呈したい気持ちでいます。

アフガニスタンで毎日自爆テロが起きないかどうかを、国際治安部隊が、毎日警戒をしています。アフガニスタンは仏教が行き渡る前から危険な地帯でした。だからこそ、仏教が必要とされ、こういう穏やかな仏像が多く造られたのです。

シルクロードの仏教の拡大を、単なる歴史のひとコマとして捉えるのではなくて、そのときに、戦争の愚かさ、気が付いた人たちが仏教というものを痛切に求めたという事実こそ、目を向けたと思います。現代社会において、課題とされていることを直視して、京都女子大学、龍谷大学といった仏教の精神に基づく大学が連携しあいながら、若い人たちに教育を施していかなければなりません。かつて、そうであったように。

最後に、寄せられた質問に一つだけ答えます。「仏教の伝来ルートについて、小乗仏教は南伝、北伝は大乗仏教

です。なぜ小乗仏教が北伝ルートを取らなかったのか」という質問です。これが、実は多くの日本人が一番誤解しているところです。北伝仏教の中心は基本的に、大乘が言うところの小乗仏教です。そこに大乘も付随していました。逆に南伝仏教にも大乘はありません。十三世紀に上座部仏教が東南アジア一帯に広まりますが、それ以前は大乘がインドネシアやカンボジアに行き渡っていました。スリランカにも大乘仏教の痕跡が残っています。観音像が存在しているのです。北伝が大乘仏教、南伝が小乗仏教というのは、全く誤った理解です。

そもそも大乘とは何なのか。いろいろな問題が錯綜していて、今、改めて問題視されています。光瑞師の時代にもそういう問題意識がありました。私の話は以上とします。本日は、どうもありがとうございました。

へキーワード

大谷探検隊 大谷光瑞